

## 初期段階の痴呆性老人の行動特性に関する検討

—デイサービス場面における行動観察を通して—

田中 美延里 ・ 掛本 知里 ・ 渡辺 文子

**要旨** 初期段階の痴呆性老人に見られる症状や行動の一部は、認知機能障害を中心とした知的機能障害に基づくものが多いといわれる。しかし、それらは老人一人一人の元来の性格、周囲との交流や環境の変化のなかでとらえた上で、援助に生かしていく必要がある。そこで、今回、在宅ケア支援のための社会資源として注目されている、デイサービスセンターを利用している初期段階の痴呆性老人を対象にして、デイサービス場面における行動を観察することによって行動特性を明らかにした。その結果、行動特性として10カテゴリーが導き出され、それらは初期症状としての記憶障害よりも、周囲との関係のとりにくさに基づくことが特徴的であった。また、共通要素として抽出された【促される行動】【目印に頼る】は、初期段階の痴呆性老人が発揮しうる力を示唆するものであり、デイサービス場面における効果的アプローチはもとより、家族支援を含めた今後の援助のあり方を検討するための重要な視点と考えられた。

**キーワード**：痴呆性老人、初期痴呆、行動特性、デイサービス、看護援助

### 1. はじめに

我が国では高齢社会の到来とともに、痴呆性老人の数が急速に増加し、その支援策は大きな社会問題となっている。

痴呆性疾患の多くは原因の解明や治療法の確立が立ち遅れており、症状は不可逆的な経過をたどるのである。そのため、治療(cure)よりもケア(care)に重点がおかれ、これまで中等度から重度の痴呆性老人を対象として施設ケアを中心に様々な研究報告(黒川, 1994; 林ら, 1995; 林ら, 1996)が行われてきた。

今後の課題としては、老人ケアの目標であるQOLの維持向上の観点から、痴呆という障害を持ちながら住み慣れた家庭や地域でその人らしい生活を送ることができるように、初期段階から痴呆性老人の在宅生活支援に向けて基盤を整えていく必要がある。

初期段階の痴呆性老人に見られる症状や行動の一部は、認知機能障害を中心とした知的機能障害に基づくものが多いといわれるが、援助においてはこれ

らを老人一人一人の元来の性格、周囲との交流や環境の変化のなかでとらえることが不可欠となる。

室伏(1993)は、診断や経過の単なる指標としての症状の把握ということではなく、痴呆という症状をもった人の悩みや生き方の表れとして、精神力動的に理解する症状の意義が重視されると述べている。また、中島ら(1992)は、痴呆性老人の生活者としての健全さ、健康さを「痴呆性老人個々の<人となり>を形作っている行為様式のとらえかた」と定義し、それらを積極的に見出し評価するための尺度作成を試みている。つまり、痴呆性老人の特異な言動を単に痴呆独自の症状に当てはめるのではなく、老人一人一人の生活史をふまえ、日々の生活場面に則して意味づけていくことが重要であると考えられる。

高齢者保健福祉推進10か年戦略の見直し(「新ゴールドプラン」)により整備が進められているデイサービスセンターは、デイケアや機能訓練事業と並ぶ「三大通所ケア」(竹内, 1996)の一つであり、初期段階の痴呆性老人を含む要介護老人の在宅ケアの継続を支援する社会資源としてその成果が注目されている。

そこで、今回、デイサービスセンターを利用して  
いる初期段階の痴呆性老人に着目し、デイサービス  
場面での行動特性を明らかにすることによって、初  
期段階の痴呆性老人のケアの開発のための基礎資料  
を得たので、ここに報告する。

## II. 研究目的

デイサービスセンターに通所している初期段階の  
痴呆性老人のデイサービス場面における行動特性を  
明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. デイサービスの概要

フィールドとしたSデイサービスセンターは、  
1992年にS市の委託を受けて設置されたB型のデイ  
サービスセンターで利用対象者は市内に居住する70  
歳以上の虚弱老人である。

利用者の平均年齢は76.5±3.1歳（1995年6月現  
在）で、女性が全体の約8割を占めている。ADL  
に関しては、歩行、食事、排泄、入浴、着脱衣の5  
項目のうち入浴と着脱衣以外において利用者の95%  
以上が自立している。

利用者は居住地の地区別に1グループ約25名の15  
グループに分けられ、3週間に1回通所するシステ  
ムとなっている。グループ内の利用者同士は同じ地  
区内で生活し日常的にも交流があり、昔からの顔な  
じみが多い状況にある。

また、アクセスは自宅または自宅近くに設けられ  
た集合場所から送迎バスを利用している。デイサー  
ビスセンターは2階建ての構造で、利用者は到着後  
1階で受付を済ませ、2階の多目的ホールへ移動す  
ることになっている。多目的ホールには4つのテー  
ブルがあり、利用者は毎回テーブルを囲むほぼ同じ  
顔ぶれの利用者達（テーブルメイト）をもち、その  
テーブルの席を拠点にして、健康チェック、レクリ  
エーション、昼食、入浴等のプログラムに参加して  
いる。

### 2. 研究対象者の選択

研究対象者として初期段階の痴呆性老人を選択す  
るにあたり、まず、B型のデイサービスセンターに  
継続通所できていること、他の利用者とともに集団  
のなかで過ごさせていることを前提とした。そして、  
利用開始当初から継続的にかかわっているスタッフ

（看護婦、介護福祉士）からの情報を基に、1年以  
上継続利用し、かつ以下の基準を満たしている利用  
者7名を対象者として選択した。

#### \*対象者選択の基準

（下記の条件の一つ以上に該当すること）

- 痴呆の診断を受け、記憶障害を中核とする症状に  
基づく行動が出現している利用者
- 他の利用者と比較して痴呆と疑われる言動が目立  
ちスタッフの介入が徐々に増えてきた利用者
- スタッフが家族から家庭での問題行動について相  
談を受けたことのある利用者

### 3. データ収集方法

データ収集にあたって、対象者の利用日（所属グ  
ループの利用日）に研究者自身がバスによる送迎も  
含めてプログラムに参加し、利用者とは行動を共にし  
ながら、対象者の行動を観察しフィールドノートを作  
成した。なお、1グループの参加人数が多いため  
に、対象者と同じテーブルに席を設けて観察を行っ  
た。対象者一人当たりの参加観察の日数は1日～6  
日で、同じ日に複数の研究者が参加することはな  
かった。

また、対象者の基本的データは、ケア記録および  
スタッフが得ている情報から収集した。

### 4. データ収集期間

1995年6月～1995年12月

### 5. 分析方法

- 1) 対象者と初めて会った日のデータは分析の対象  
から外し、7名分のフィールドノートを付き合わせ  
た。
- 2) デイサービス全体の流れのなかで、他の利用者  
と比べて特徴的な行動を取り出し、それらを一つの  
文章が一つの行動を意味する単位を1コードとして、  
コーディングを行った。この時、行動に結びついた  
きっかけも含めて1コードとした。また、複数の状  
況が絡み合った現象は研究者間で検討した。
- 3) 各コードを類型化し、カテゴリーとした。類型  
化の作業は妥当性を高めるために研究者3名で検討  
を重ねながら行った。

## IV. 結果

### 1. 対象者の基本的属性（表1.参照）

対象者は、男性5名、女性2名で、そのうち後期  
高齢者は6名であった。男性のうち2名は妻が利用

表1. 対象者の概要

事例	性	年齢	申請時の診断内容	利用状況
A	女	78	脳卒中後遺症、脳血管性痴呆	
B	男	72	脳卒中後遺症、脳血管性痴呆	時々妻が同伴
C	男	80	高血圧症、脳血管性痴呆	
D	女	80	脳卒中後遺症、脳血管性痴呆	
E	男	85	歩行障害	
F	男	79	慢性気管支炎、慢性胃炎	妻と一緒に利用
G	男	82	洞性不整脈、慢性肝炎	妻と一緒に利用

者として一緒に通所していた。また、利用申請時に脳血管性痴呆と診断されていた者は4名であった。

2. カテゴリー化された行動特性 (表2. 参照)

類型化により、表2に示したとおり、10カテゴリーが行動特性として導き出された。また、これらのカテゴリーは相互に関連していた。

3. 行動特性から抽出された共通要素

類型化の作業段階で、行動に結びついたきっかけに着目することによって各々のカテゴリーに共通する要素として【促されての行動】【目印に頼る】が抽出された。

V. 考察

1. デイサービスという枠組みの特徴の反映

在宅の痴呆性老人の家族に対する実態調査(露木, 1993)では、家族が痴呆と気づいた変化は物忘れに関連した行動が最も多いと報告されている。しかし、今回の結果では、初期症状としての記憶障害に基づく行動よりも、<周囲のことに気がつかない><人の輪から外れる>のように、むしろ集団の場で表面化する、周囲との関係のとりにくさに基づく行動特性が導き出されたことが特徴的であった。

これは、生活場面としてのデイサービスという枠組みの特徴が反映されたものと考えられることができる。

デイサービス事業は、障害をもちながら地域で生活する老人が、心身の機能の維持向上の訓練を通して、より自立的な生活への可能性を高めるとともに、その介護者の心身の負担を軽減することを目的としている。デイサービスセンター利用者に対する実態

調査(稲葉ら, 1993; 渡辺ら, 1994)によると、利用者にとっての通所目的やセンターでの楽しみは社会的交流であり、実際にそれらが利用者の心身に大きな影響を与えているといわれている。つまり、生活場面としての大きな特徴はデイサービスが社会的交流の場であることにあり、グループが地区別に固定されているSデイサービスセンターのシステムが利用者間の交流を促進する要因となっていることが予測される。

このように、初期段階の痴呆性老人の行動特性に示された周囲との関係のとりにくさは、利用者同士あるいは利用者とスタッフの関係性が老人の行動の基盤になることを浮き彫りにしたものだといえるだろう。

2. 初期段階の痴呆性老人が発揮しうる力

共通要素にみられたように、初期段階の痴呆性老人はデイサービスにおける様々な場面で、スタッフからの促しにスムーズに応じることによって集団のなかで行動を修正する能力を保持していると考えられる。また、毎回同じテーブルで過ごしているなじみの利用者や離れた位置で過ごす妻を目印にして頼ることによって集団のなかで過ごすことができている。すなわち、自分自身が行動を起こす際の手がかりを身近な人に求め、積極的に見出す能力を保持していると考えられる。

初期段階の痴呆性老人は、デイサービスの環境やプログラム、そして一定のテーブルメイトという決められた枠のなかであれば、このような能力を発揮することによって痴呆という障害をその人なりに取

表2. 行動特性カテゴリーと行動の例

行動特性カテゴリー	行 動 の 例
<ペースが遅い>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレから戻るまで時間がかかる</li> <li>・食事に時間がかかる</li> <li>・歩行が緩慢</li> </ul>
<一つ一つの動作が完全でない>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・薬を飲む時こぼす</li> <li>・身だしなみを整えられない</li> <li>・体温計を上手に使えない</li> </ul>
<物忘れがある・すぐに思い出せない>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・持ち物を置き忘れる</li> <li>・受付をするのを忘れる</li> <li>・帰りの時間を忘れる</li> <li>・直前の行動を忘れる</li> </ul>
<周囲のことに気がつかない>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲーム等で自分の番が来ても気がつかない</li> <li>・周囲と合わせて食べ始められない</li> <li>・バスで隣の空席に気がつかない</li> <li>・自分に関する話題に気がつかない</li> </ul>
<唐突に行動が変わる>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・希望していた入浴やカラオケをとりやめる</li> <li>・突然話題を変える</li> </ul>
<やりとりが続かない>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会話がすれ違う</li> <li>・人の話に耳を傾けない</li> </ul>
<人の輪から外れる>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バスの中で他の人と話をしない</li> <li>・フリータイムは一人になる</li> </ul>
<新しい課題をこなせない>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しいゲームをルールどおりにできない</li> <li>・新しい体操の動作に合わせられない</li> </ul>
<自分らしさにこだわる>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔の仕事の話を何度も繰り返す</li> <li>・カラオケで〇〇を歌うことにこだわる</li> <li>・リーダーシップを取ろうとする</li> <li>・テーブルでは帽子を取らない</li> </ul>
<不自然な繰り返し動作>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何もない所でお碗の蓋を開け閉めするような動きを繰り返す</li> </ul>

り繕いながら安定した過ごし方ができると考えられる。

### 3. 関係性をふまえた行動理解による援助の方向性

これまで述べてきたように、初期段階の痴呆性老人に対する援助においては、日々の生活場面での周囲の人との関係性をふまえて行動を理解していくことが鍵であり、痴呆性老人自身のもつ力を発揮しやすいように働きかけることが重要と考えられる。

デイサービス場面では、スタッフが基本的な日常生活動作を補いながら痴呆性老人にとって目印となっている利用者を把握し、その人を活用した働きか

けを工夫することによって間接的に痴呆性老人の行動を促したり修正したりできる可能性があるだろう。

近年、痴呆性老人と家族の相互作用が介護に与える影響（太田, 1996）が注目され、家族との関係性に着目した看護援助のあり方が検討されている。諏訪ら（1996）は、家族看護が発展していくよう、家族看護者が痴呆性老人との関係性に気づくことを促す援助の例として、デイケアのような場を家族看護者にも提供し、そこでの老人同士のやりとり、デイケア職員とのやりとりの中で、痴呆性老人がそれまで家族看護者には見せることのなかった表情やしく

さ、行動を示すことをあげている。

このように、通所ケア場面での他の利用者やスタッフとの関係性と家庭での家族との関係性を結びつけることによって、一人一人の痴呆性老人を取り巻く周囲の人との関係性を総合的にとらえることが可能となる。そして、これらは、デイサービス場面での効果的アプローチはもとより、家族支援を含めて日々の生活場面での援助のあり方を検討する際の重要な視点となりうると考えられる。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、行動観察を通して帰納的に行動特性を導き出す方法を採用したことにより、一デイサービスセンターにおける少数の対象者からのデータ収集にとどまった。そのため、センターの特徴や対象者の属性の偏りによって初期段階の痴呆性老人全体の行動特性とみなすことはできないという限界がある。

また、デイサービス利用回数が3週間に1回であるため従来の通所ケアの範疇でとらえにくい面があったことは否めない。しかし、地区別のグループ編成によって日常的にも交流のある利用者同士が定期的に集う場は地域ケアを重視したデイサービスの新たなスタイルとして今後も注目すべきであり、日常的交流による親密度を含めてさらに検討していく必要がある。

## VII. おわりに

今回明らかになった初期段階の痴呆性老人の行動特性をふまえ、デイサービス場面での効果的アプローチを検討しデイサービス利用期間が延長されるように援助していくことが望まれる。

また、家庭での痴呆性老人の行動特性と関連づけた上で、家族がそれらの行動をどのように受け止め対処しているかを知る必要があると考えられる。そして、これらを基礎資料として、在宅ケアの継続

を可能にするための介護家族への情緒的教育的支援のあり方を検討していきたい。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただいたSデイサービスセンターの皆様にご心より感謝いたします。

本報告は文部省科学研究費の助成を得て行われた研究の一部をまとめたものである。

## 文 献

- 林光弘他(1996). 痴呆性老人グループホームケアの理念と技術, バオパブ社.
- 林優子他(1995). 痴呆老人の排泄行動からみた感情表現や意思表示としてのメッセージー1事例による分析を通してー. 日本精神保健看護学会誌, 4(1):23-30.
- 稲葉佳江他(1993). デイサービス利用者の健康状態と通所状況に関する調査研究. 日本公衆衛生雑誌, 40(2):105-114.
- 黒川由紀子(1994). 痴呆性老人に対する回想法グループ. 老年精神医学雑誌, 5(1):73-81.
- 室伏君士(1993). 老年期のQOLー痴呆患者のQOLー. 老年精神医学雑誌, 4(9):1007-1012.
- 中島恵子他(1992). デイケアにおける痴呆性老人に対する生活健康スケール作成の試み. 社会老年学, 36:39-49.
- 太田喜久子(1996). 痴呆性老人と介護者の家庭における相互作用の構造. 看護研究, 29(1):71-82.
- 諏訪さゆり他(1996). 痴呆性老人の家族看護の発展過程. 看護研究, 29(3):203-214.
- 竹内孝仁(1996). 通所ケア学. 医歯薬出版.
- 露木敏子(1993). 東京都における在宅痴呆高齢者の現状と課題(第1報)ー対応困難なケースを中心にー. 保健婦雑誌, 49(1):51-59.
- 渡辺美鈴他(1994). 在宅要介護老人の心身および生活状況に及ぼすデイサービスセンターの効果について. 日本衛生学雑誌, 49:861-868.

# **A Study of Behavioral Characteristics of Elderly People with Early Dementia, Using Participants' Observations in Day Service Situations**

MINORI TANAKA, SATORI KAKEMOTO and FUMIKO WATANABE

*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science,  
Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama-ken 719-1197, Japan*

**Key words:** Demented Elderly People, Early Dementia, Behavioral Characteristics, Day Service, Nursing Care